

## NHK新技術局長・寺田健二氏インタビュー

# NHK技術陣が切り開く 展望と考え方



1990年 日本放送協会 入局 函館放送局技術部  
1993年 技術局  
2004年 広報局 副部長  
2008年 人事総務局 主管  
2014年 技術局 専任部長  
2017年 編成局 専任局長  
2019年 経営企画局 特別主幹  
2021年 技術局長

東京オリンピックでは、8Kスーパーハイビジョンやロボット実況・字幕、手話CG実況など、NHK発のさまざまな技術が活躍した。それでも放送技術の進歩に終わりはない。IP化をはじめとするネット系システムとの融合は加速し、サービス面でも放送の同時配信などの新たな動きが続いている。放送技術の進化をリードする立場である「公共メディアNHK」は、こうした将来にどう対応していくのか。4月に技術局長に就任した寺田健二氏に話を聞いた。（構成：高瀬徹朗・本誌ライター、写真：川津貴信）

### 新放送センターのIP化 判断のタイミングは慎重に見極めたい

—— 新しく就任された技術局長としての意気込みからお願いします。

**NHK技術局長・寺田** 技術局に戻ってきたのは4年ぶりですが、この間、さまざまな大きな動きがありました。東京オリンピック・パラリンピックを無事に終えた今、当面の大きな取り組みは渋谷にあるNHK放送センターの建て替えです。4年前は建て替えが決まり設備検討に着手した段階でしたが、現在は2025年度の情報棟運用開始を目指して設備設計を着実に進めています。以前は技術的な計画を立てる立場でしたが、技術局長となると、設備の開発のみならず、それをどう計画的・戦略的に進めていくかを統括する立場となり、難しいですがやりがいを感じています。効率的な業務ができる新放送センターをいかに整備していくかはNHKの経営課題であり、技術局長としてしっかり取り組んでいきたいと考えています。

—— 新放送センター整備としてSDIベースバンドかIP導入かの判断があると思います。

**寺田** 将来的に放送設備のIP化が進んでいくことは確実としても、移行するタイミングの見極めは必要です。現在、導入後の課題を整理

しつつ慎重に議論しています。海外での事例も参考にしたいところですが、昨今のコロナ禍の下では簡単に視察することができません。実際の運用から得られた知見を入手するため、メーカー各社と積極的に情報交換をしつつ、どのタイミングでIP化を進めていくのが運用面、効率面で最適なのか。そのあたりを慎重に見極めなければならないと考えています。

—— IP化するとオペレーション面も大きく変わってきます。

**寺田** IP化により今とは運用面が大きく変わりますし、効率的となるように変えていかねばなりません。その際、特に重要なのは人材面です。IP技術を持つ人材を増やす必要がありますが、放送業界全体も含め、そのような人材は引く手あまたで、外部から採用するのは難しい状況です。当然、NHKの内部で育てていく必要があるでしょう。はじめから完成された人材を求めのではなく、内部で実務を通して実力を身につけた人材が周囲を引っ張って行ってくれるというのが理想的です。

—— 新卒の技術者採用をどう考えていますか。

**寺田** 技術局の立場として人事担当と話す機会があるので、技術の視点から今後どのような人材が必要になるかということを伝えたいと

考えています。

### オリンピックで見た OBSのクラウドIPシステムの印象

—— 東京オリンピック・パラリンピックでは、オリンピック放送機構（OBS）のシステムが大きく変化しています。このあたり、どういった関心を持たれたのですか。

**寺田** 開幕前に見学させていただきましたが、「すごいな」という一言です。クラウドとIPを極めて有効に活用したシステムで、4Kも含めて伝送・配信系にIPを導入したのが成功した要因だと感じました。

—— NHK独自の取り組みで、競技データを用いたロボット実況・字幕と手話CG実況を配信されました。

**寺田** 開始前に放送技術研究所のデモで見ていたのですが、実際のサービスを行う段階までかなり良く仕上げていきました。公共メディア本来の役割の一つであり、高い評価を得られたのは良かったと思います。ただし、今回用いた競技データは、情報量的には決して多いものではありませんでした。この先、元となる情報量を増やしつつ、さらに表現の幅を広げていくことができるのか。技研を中心に研究開発を進めていく必要があるでしょう。